

中村要氏(1504—1932年)は、滋賀郡眞野村に生れ、大正昭和の兩期にわたり、京都帝大の天文部の一員として活躍した事蹟は、本會員中の大多數が熟知してゐられることと思ふ。氏は比較的若年で逝つたが、其の行蹟は、流星・彗星・變星・小遊星・太陽・火星等の各分野に於いて開拓的な觀測を勵んだのみならず、天文器械の研究に傾到し、殊に、反射望遠鏡の製作に於いて前人未到の新境地に進み、晩年には更に大レンズの研磨にも着手して、夥しい優秀作品を世に贈つた天才である。氏の感化や足蹟は今尙、國內到る所に見出され、又、多くの追従者や、後繼者を出してゐる。若し氏が無かつたならば、最近年の我が國の天文界は、頗る單調無味な歩みのみを見るに止まつたであらうことを、識者は誰でも知つてゐる。

“近江と天文學”の紀念講演を終るに當つて、特に此の田上の郷里に建つた天文臺の落成を見た人々に對して、自分は、是非一言、“田上隕鐵”のことを述べざるを得なかつた。之れは吾々の義務でもあり、又、特權でもある。

田上隕鐵は、明治18年(1885年)に此の田上の奥山の某地點で發見されたもので、重量170キログラム(46貫)、實に我が國第一のものである。今この隕鐵は東京の科學博物館に陳列されてあるが、この珍らしい天體の存在を、我が郷里の人々は、不思議にも、殆んど誰も知らないのである。自分は此の郷里人の無智識を残念に思つてゐたので、丁度この落成式の席上に於いて、可なり詳細に此の解説をなし、郷土の新しい誇りを茲に一つ紹介し得たことを喜ぶものである。——と同時に、此の日本最大の隕鐵が、其の發見者によつて“田上隕鐵”と命名されたことを喜ぶものであるけれど、學界一般は此の貴重な隕星の名の呼び方を、今日まで、殆んど皆誤つてゐた點を、是非修正して頂きたい希望を、近江人として、又、田上人として、有つものである。“田上隕鐵”は、正しく“タナカミ隕鐵”と呼ぶべきものである。(終)

時刻の改正に際して

鐵道省は來る十月1日から愈々時計の“午前”“午後”を廢して、24時間ブツ通しの呼び方に改めると言ふ。24時制は、吾々天文人は多年既に實行してゐるのであつて、又、之れを一般社會が採用するやう、永く主張し續けて來たものである。殊に今尙“午前”“午後”を用ひてゐるのは、英米と支那日本だけなのだから、是非改めなければならぬは明白である。(メートル法反對論だつて、又、華氏の寒暖計だつて、皆、英米流のものだ!一刻も早く改めるべし!!)

今まで24時制反對論者の唯一の論據は、時計の目盛りが12になつてゐるといふことだつた。今後は、新制度に適するやうな新しい時計の文字盤を、時計製造家のために考案してやるが宜しいと思ふ。次號から、本誌上にも、かうした新案を募り、良いのを發表することとしたい。(C)